

【 復活のトロパリ 第6調 】



てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、
 天使 軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリアはか
 番 兵 死 者 の 如 し 、 マ リ ヤ は 墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね
 立 爾 潔 体 尋

たり。なんぢはぢごくにいざなわれず
 爾 地 獄 誘

して、ぢごくをとりこにし、いのちをた賜
 地 獄 虜 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。
 者 處 女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは
 死 復 活 し 主 よ 、 こ う え い は

なんぢにきす。
 爾 歸

【 生神女誕生祭のトロパリ 第4調 】



しょうしんど うていぢよ よ、なんぢのうまれ
 生 神 童 貞 女 爾 の 誕 生

はぜんせかいによろこびをしらせた り、け蓋
 全 世 界 に 歓 喜 を 知 り 、 け 蓋

だしなんぢよりぎのひたるハリストスわが かみはかが
 爾 義 日 我 神 輝

や け り 。 か れ は の ろ い を と き て し ゅ く
 彼 詛 解 祝
 ふ く を あ た え 、 し を ほ ろ ぼ し て わ れ ら に
 福 與 死 滅 我 等
 え い え ん の い の ち を た ま え り 。
 永 遠 生 命 賜

【 生神女誕生祭のコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ と セ い し ん に き
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸
 す 、
 し じ ょ う な る も の よ 、 な ん ち の セ い な る
 至 淨 者 爾 聖
 う ま れ に よ り て 、 イ オ ア キ ム お よ び ア ン ナ は こ
 誕 生 因 及 子
 な き は ち 、 ア ダ ム お よ び エ ヴ ア は し の き ゅ う か
 辱 及 死 朽 壊
 い を ま ぬ か れ た り 。 て い ざ い よ り と か れ
 免 定 罪 釋
 し な ん ち の た み も こ れ を ま つ り て 、 な ん ち
 爾 民 之 祭 爾
 に よ ぶ 、 た い の あ れ た る も の は
 呼 胎 荒 者



【 復活のコンダク 第6調 】



司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有
となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾
り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に
痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が

せい さいだん こうえい まえ た なんち どうぜん ふくはいさんえい たてまつ た
 聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる
 もの しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんち
 者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の
 じんじ もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい
 仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈
 からだ せい われら しょうがいぜんこう もつ なんち つと え たま せい
 と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖
 なる しょうしんぢよ こせい なんち よろこび な しょうせいじん きとう よ
 なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せい なる か み 、 せい なる ゆ う き 、 せい なる
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐
 よ 。 せい なる か み 、 せい なる ゆ う き 、 せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 なるじょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐
 め よ 。 せい なる か み 、 せい なる ゆ う き 、
 聖 神 聖 勇 毅
 せい なるじょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐
 れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せい しん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 神 聖 勇

き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第6調 】

司祭) つつし 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) なんぢの神にも、

司祭) えいち 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
 主 爾 民 救 爾 業

ふくをくだしたまえ。
 福 降 給

誦經) しゅよ、われなんぢよ、われかため、われためもだなか
 主よ、我爾に呼ぶ、我の防固よ、我が爲に黙す母れ、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
 主 爾 民 救 爾 業



誦經) わがたましいしゅあがわがしんかみわきゅうしゅよろこ
我が霊は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。



【使徒經 176 端 コリント後書 4 章 6～15 節】

司祭) えいち
睿智、

誦經) せいしと じん たつ こうしょ よみ
聖使徒パウエルがコリント人に達する後書の讀、

司祭) つつし き
謹みて聴くべし、

誦經) けいてい くらやみ ひかり て めい かみ われら こころ てら
兄弟よ、暗より光の照ることを命ぜし神は、我等の心を照せり、イイススハリス
トスの面にある神の光榮を知る知識を以て我等を輝さん爲なり。然れども我等は此
の寶を土の器に藏む、莫大の能が神に由りて、我等に由らざらん爲なり。我等四方
より患難を受くれども、窮せず、險しき境に處れども、望を失わず、窘逐せらるれど
も、棄てられず、倒さるれども、亡びず。常に身に主イイススの死の狀を佩ぶ、イイススの
生命も我等の身に顯れん爲なり。蓋我等生ける者は、常にイイススの爲に死に付さる、
イイススの生命も我等の死すべき肉體に顯れん爲なり。是くの如く死は我等の中に行い、
生命は爾等の中に言うなり。然れども録して、我信ず、故に言えりと、あるが如く、我
等も此くの如き信仰の神を有ちて信ず、故に言う、主イイススを復活せしめし者は、イイ
スを以て我等をも復活せしめ、且爾等と偕に己の前に立たしめんことを知るに因る。
蓋萬事は爾等の爲なり、豊かなる恩寵が、多くの人の感謝に由りて、神の光榮
の溢るるを致さん爲なり。

(比較用 口語訳)「やみの中から光が照りいでよ」と仰せになった神は、キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、わたしたちの心を照して下さったのである。しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは、四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害に会っても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現れるためである。わたしたち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されているのである。それはイエスのいのちが、わたしたちの死ぬべき肉体に現れるためである。こうして、死はわたしたちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働くのである。「わたしは信じた。それゆえに語った」としるしてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、わたしたちも信じている。それゆえに語るのである。それは、主イエスをよみがえらせたかたが、わたしたちをもイエスと共によみがえらせ、そして、あなたがたと共にみまえに立たせて下さることを、知っているからである。すべてのことは、あなたがたの益であって、恵みがますます多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである。

アポストロス
【 使徒経 240 端 フィリピ書 2 章 5 節～11 節 】

誦経) ^{けいてい}兄弟よ、^{なんぢら}爾等は^{こころ}ハリストス ^{もつ}イイススの ^{こころ}意を以て ^{かれ}意とすべし。^{かみ}彼は^{かたち}神の像にして、
^{かみ}神と^{ひと}匹しくなることを ^{ひとごころ}僭うとせざりき、^{しか}然れども ^{おのれ}己を ^{むな}虚しくして、^{ぼく}僕の ^{かたち}貌を受け、
^{ひと}人と同じ^{おな}き者と^{もの}爲りて、^な外形に^{がいけい}於て^{おい}人の^{ひと}如くなり、^{ごと}己を^{おのれ}卑くして、^{ひく}死に至るまで ^し順^{いた}したが^{したが}り
^{かつじゅう}い、^{うじ}且 ^か十字架の^し死に至れり。^{いた}故に^{ゆえ}神も^{かみ}彼を^{かれ}無^{むじょう}上に^{たか}高くして、^{かれ}彼に^{およそ}凡^なの名に^こ超ゆる^な名
^{たま}を^{およ}賜えり、^{てん}凡^あそ^ち天に^あ在り、^{およ}地に^ち在り、^{した}及び^あ地の^{もの}下に^{ひざ}在る者の^な膝は、^{まえ}イイススの^{かが}名の^な前に^か屈
^{かつおよそ}み、^{した}且 ^{しゅ}凡^うの^{みと}舌は^{こうえい}イイスス ^{かみちち}ハリストスが^き主たる^{ため}を^た承け^た認めて、^た光^た榮を^た神^た父に^た歸せん^た爲^たなり。
り。

(比較用 口語訳) キリスト・イエスにあっただいしているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

【 アリルイヤ 主日第6調 及び生神女誕生祭の 第8調 】

司祭) ^{なんぢ}爾に^{へいあん}平安、

誦経) ^{なんぢ}爾の^{しん}神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{しじょうしゃ おおい} アリルイヤ、^{した お} 至上者の覆^{もの}の下に居る者は、^{ぜんのうしゃ かげ}全能者の蔭^{した やす}の下に安んず、



誦經) ^{しゅ い} 主に謂う、^{なんぢ われ}爾は我の避^{かくれが}所、^{われ ふせぎ}我の防禦、^{われ たの}我が頼む^{ところ}所の^{われ かみ}我の神なりと、



誦經) ^{しゅ} 主よ、^{なんぢおよ}爾及び爾^{なんぢ}が能^{のうりよく}力の匱^{ひつ}は爾^{なんぢ}が安^{あんそく}息の^{ところ}所に^た立てよ、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい}人を愛する主^{しゅさい}宰よ、^わ我が^{こころ}心に^{かみ}神を知る^し智慧の^{ちえ}淨^{いさぎよ}き^{ひかり}光を^{かがや}輝かし、^わ我が思

^{ねん め}念の目^{ひら}を啓きて、^{なんぢ}爾が^{ふくいん}福音の^{おしえ}教を^{さと}悟らしめ^{たま}給え、^わ我が衷に^{うち}爾の^{なんぢ}福たる^{ふく}誠^{いましめ}

^{おそ}を畏る^{おそれ}畏^いをも入れて、^{われら}我等が^{ことごと}悉^{にくたい}くの肉體の^{よく}慾を^ふ踏み、^{およ}凡そ^{なんぢ}爾の^{よろこ}喜ぶ

^{ところ}所を^{おも}思い^か且つ^{おこな}行いて、^{ぞくしん}屬神の^{せいかつ}生活を^す過ぐるを^{いた}致させ^{たま}給え、^{けだし}蓋^{かみ}ハリストス神

^{なんぢ}よ、^わ爾は^{たましい}我が^{からだ}靈と^{こうしょう}體との^{われらなんぢ}光^{なんぢ}照なり、^{むげん}我等^{ちち}爾と^{しせいし}爾の無原の父と至聖至

^{ぜん}善にして^{いのち}生命を^{ほどこ}施す^{なんぢ}爾の^{しん}神とに^{こうえい}光榮を^{けん}獻ず、^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世々に、アミン。)

【 ^{エヴァンゲリオン}福音經 マトフェイ福音書92端 22章35~46節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし}肅^たみて^{せいふくいんけい}立て^き聖福音經を^{しゅうじん}聴くべし、^{へいあん}衆人に平安、



司祭) マトフェイ^{でん}傳^{せいふく}の聖^{いんけい}福^{よみ}音^の經^のの讀、



司祭) 謹^{つつし}みて聽^きくべし、彼^かの時^{とき}一人^{ひとり}の律^{りつぽう}法師^{しかれ}彼^{こころ}を試^とみて、問^いいて曰^しえり、師^{りつぽう}よ、律^{うち}法^のの中

に何^{いづれ}の誠^{いましめ}か大^{おお}なる。イイスス之^{これ}に謂^いえり、爾^{なんぢ}心^{こころ}を盡^{つく}し、靈^{たましい}を盡^{つく}し、意^{おも}を盡^{つく}

して、主^{しゅ}爾^{なんぢ}の神^{かみ}を愛^{あい}せよ、此^これ誠^{いましめ}の第^だ一^{いち}にして大^{おお}なる者^{もの}なり。第^{だい}二^には是^{これ}に同^{おな}じき

もの、者^{もの}、即^{すなわ}ち爾^{なんぢ}の鄰^{となり}を愛^{あい}すること己^{おのれ}の如^{ごと}くせよ。斯^この二^{ふたつ}の誠^{いましめ}には悉^{ことごと}くの律^{りつぽう}法^の

と預^{よげん}言^{しゃ}者と繋^かれり。ファリセイ等^らの集^{あつ}まりし時^{とき}、イイスス之^{これ}に問^といて曰^いえり、爾^{なんぢ}等^らハリスト

スの事^{こと}を如何^{いか}に意^{おも}うか、彼^{かれ}は誰^{だれ}の子^こなるか。曰^{いわ}く、ダヴィドの子^こなり。彼^{かれ}曰^{いわ}く、然^{しか}らば如何^{いかん}

ぞダヴィドは、聖^{せい}神^{しん}に由^よりて、彼^{かれ}を主^{しゅ}と稱^{とな}うる、云^{いわ}く、主^{しゅ}我^わが主^{しゅ}に謂^いえり、爾^{なんぢ}我^わが右^{みぎ}に

坐^ざして、我^わが爾^{なんぢ}の敵^{てき}を爾^{なんぢ}の足^{あし}の竟^{だい}と爲^なすに迄^{いた}れと。然^{しか}らばダヴィド彼^{かれ}を主^{しゅ}と稱^{とな}うれば、

如何^{いかん}ぞ彼^{かれ}は其^{その}子^こたる。一^{ひとり}人も之^{これ}に言^{ことば}を答^{こた}うる能^{あた}わず、是^この日^ひより敢^あて復^{また}彼^{かれ}に問^とう者^{もの}な

かりき。

(比較用 口語訳) ひとりの律法学者が、イエスをためそうとして質問した、「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」。イエスは言われた、「『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている」。パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった、「あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか」。彼らは「ダビデの子です」と答えた。イエスは言われた、「それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。すなわち『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい』。このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか」。イエスにひと言でも答えうる者は、なかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者も、いなくなった。

エヴァンゲリオン
【 福音經 ルカ福音書 54 端 10 章 38～42 節、11 章 27～28 節 】

司祭) 彼の時、彼等が行ける時、イエス ^{ひとつ} の村に入りしに、或 ^{あるおんな} 婦 マルファと名づくる者、
彼を其 ^{かれ} 家 ^{そのいえ} に迎 ^{むか} えたり。其 ^{そのしまい} 姉妹にマリヤと名づくる者あり、イエスの ^{そくか} 足下 ^ざ に坐して、其 ^{そのことば} 言
を聴 ^き けり。マルファは ^{きょうじ} 供 ^{おお} 事 ^よ の多 ^{こころ} きに因 ^{わづら} りて ^つ 心 ^い を煩 ^{しゅ} わし、就 ^{われ} きて ^{たす} 曰 ^{しまい} えり、主 ^わ よ、我が ^{しまい} 姉妹、
我 ^{われひとり} 一人 ^{のこ} を遣 ^{きょうじ} して ^{なんぢい} 供 ^な 事 ^な せしむるを ^{これ} 爾 ^{めい} 意 ^{われ} と爲 ^{たす} さざるか、之 ^{これ} に命 ^{めい} じて、我 ^{われ} を助 ^{たす} けしめよ。イ
ス ^{かれ} 彼 ^{こた} に答 ^い えて曰 ^{なんぢ} えり、マルファよ、マルファよ、^{なんぢ} 爾 ^{おお} は多 ^{こと} くの事 ^{おもんばか} を ^{こころ} 慮 ^{ろう} りて ^ろ 心 ^う を勞 ^べ せ
り、然 ^{しか} れども ^{もと} 需 ^{ところ} むる ^{ひとつ} 所 ^よ は ^{ぶん} 一 ^{えら} のみ。マリヤは善 ^{これ} き ^{かれ} 分 ^う を擇 ^べ びたり、是 ^{これ} は ^{かれ} 彼 ^う より ^べ 奪 ^べ う可 ^べ からず。
此 ^{これ} を言 ^い う時 ^{とき}、一 ^{ひとり} の ^{おんな} 婦 ^{たみ} 民 ^{うち} の中 ^{こえ} より ^あ 聲 ^{かれ} を揚 ^い げて、彼 ^{なんぢ} に謂 ^{はら} えり、^{はら} 爾 ^{なんぢ} を孕 ^す みし ^す 腹 ^す と ^す 爾 ^す が ^す 哺 ^す
い ^ち し乳 ^{さいわい} とは ^{かれ} 福 ^い なり。彼 ^{しか} は曰 ^{かみ} えり、然 ^{ことば} り、神 ^き の ^{これ} 言 ^{まも} を聴 ^{もの} きて ^{さいわい} 之 ^{さいわい} を守 ^{さいわい} る者 ^{さいわい} は ^{さいわい} 福 ^{さいわい} なり。

(比較用 口語訳) イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れ
た。この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた。ところが、マ
ルタは接待のことで忙がしくて心をとらみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだ
けに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっし
ゃってください」。主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思
いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良
い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである」。イエスがこう話して
おられるとき、群衆の中からひとりの女が声を張りあげて言った、「あなたを宿した胎、あなたが吸わ
れた乳房は、なんとめぐまれていることでしょう」。しかしイエスは言われた、「いや、めぐまれてい
るのは、むしろ、神の言を聞いてそれを守る人たちである」。



※聖体礼儀③へ